

不足と過剰

——日韓両国の初等教育機関における

ナショナリズム教育に関する国際比較社会学的な一考察

矢ヶ崎 誠 治

Shortage and Excess

— An International Comparative Sociological Study

on Nationalism Education at Elementary Schools in Japan & Korea.

Seiji Yagasaki

目 次

始めに

第1章 ナショナリズム教育の位置と比重

第1節 ナショナリズムとナショナリズム教育

第2節 教育の基本法令におけるナショナリズム教育の位置

第3節 初等教育段階の道徳教育におけるナショナリズム関連項目の比重

第2章 ナショナリズム教育の不足と過剰

第1節 不足を助長した反戦平和主義（日本）

第2節 過剰を不可避にした反共民族主義（韓国）

第3章 曲がり角のナショナリズム教育

第1節 及び腰の正常化（日本）

第2節 なし崩し的な柔軟化（韓国）

終わりに

概 要

日本の初等教育機関は道徳科目の教育内容項目に含まれている「愛国心」、「郷土愛」、「人類愛」、「国際親善」などいわゆるナショナリズム関連項目に関する教育を道徳教育としてはほとんど行わず、いわば“不足”の状態にある。これに対して、韓国の初等教育機関は非常に“過剰”に教えてきた。ナショナリズム教育に関する両国のこのギャップの深さは両国の経て来た現代史の差を反映しているが、相互理解のためには“不足”と“過剰”の同時修正が望まれる。

始めに

最も近い隣国・韓国の初等学校〔小学校〕の道徳教科教科書を手にして何よりも驚かされるのは、1学年用から6学年用に至るほぼ全巻にわたって、太極旗〔韓国国旗〕について学習するページがあり、国旗学習を通してナショナリズム意識を不断に確認していることである。¹ 我が国の場合は特設「道徳」用副読本には日の丸に言及しているページがほとんど無いだけに、180度異なる日韓のギャップの大きさに圧倒されるのである。ナショナリズム意識を培うナショナリズム教育に関して、日韓間に横たわるこの大きなギャップの実態を把握し、その差は何に由来するのか、今後はどうなるのか等について、国際比較社会学的な視点から考察してみよう。なお、〔印の中は筆者の注である。〕

第1章 ナショナリズム教育の位置と比重

第1節 ナショナリズムとナショナリズム教育

“ナショナリズム教育”とは読んで字のごとく“ナショナリズム (nationalism)”を児童生徒に“教育”することである。ところが、その“ナショナリズム”という用語は使用者の国籍や視点によって、“国民主義”、“国家主義”、“民族主義”など多様な訳語が併存する極めて多義的であり、そうした多義性の由来や実態をじっくり比較分析すれば、それだけで国際比較社会学の独立した論文も十分できそうな重要な用語である。² しかし筆者には残念ながら当面その時間が無いため、本考察では、“ナショナリズム”をとりあえず“国民主義”と“国家主義”を合体させた“国民国家主義”と受け止める。“国家主義”は必要な場合には“個”や“個人”の利害を押さえて“国”や“国家”の利害を優先するが、その優先をあくまでも“国民”が民主的手続きに基づいて了解した範囲に限定する場合を“国民国家主義”と解釈したいのである。それは戦前の日本の超国家主義、ドイツのナチズム、イタリアのファシズムなど、“国民主義”の名を必要な時だけ悪用した国家至上主義と一線を画したいからに外ならない。従って“ナショナリズム教育”は、そうした“国民国家主義”を教育するという意味になる。

第2節 教育の基本法規におけるナショナリズム教育の位置

さて、そうしたナショナリズム教育は、一国の基本的な教育方針を盛り込んだ教育の基本法規の中では、どんな位置を占めているのだろうか。

まず日本の教育の基本法規と言えば『教育基本法』と『学校教育法』³だが、前者は第1条で「平和的な国家および社会の形成者として」の「国民の育成」を高らかに謳い上げてはいるが、現存している国家である“日本”やその構成員である“日本国民”をどう見なすか、などについては一切言明していない。わずかに後者の第18条（小学校の目標）第2項

として「郷土および国家の現状と伝統について、正しい理解に導き、進んで国際協調の精神を養うこと」と規定している。「郷土および国家……」とあれば、「愛情や誇りを持たせ……」と続くのが常識的だが、この第2項はあくまでも“理解”の対象にしているだけである。第三者的な“理解”だけで、「平和的な国家および社会の形成者として」の「国民の育成」が可能なのだろうか。しかも、「正しい理解」とはどんな「理解」を意味するのか、「正しい理解」がある以上、“正しくない”「理解」もあるはずだが、一体、いかなる「理解」なら「正しい」のか。そうした点が何も規定されずに放置されている。

これに対して韓国の教育の基本法規は『教育法』⁴ 一本にまとまっている。しかも、計7項で構成されている第2条（教育方針）の第2項で「愛国愛族の精神を培い国家の自主独立を維持発展するようにさせ、ひいては人類平和建設に寄与するようにする」と“愛国愛族”つまり自国と自民族への愛情の培養を高らかに謳い上げている。

第3節 初等教育段階の道德教育におけるナショナリズム関連項目の比重

前節で示したように、日韓間では、教育の基本法規におけるナショナリズム教育の位置付けが異なっているが、では、そのナショナリズム教育を学校で具体的に実施する場面では、どうであろうか。

学校教育でナショナリズムを取り扱うとなれば、やはり何と言っても道德教育の場であろう。道德教育では、その教育内容を便宜上、何十種の項目に細分して、内容項目別に教育するのが通例だが、本考察は、そのうち、上記“国民国家主義”に関連すると目される諸項目（「愛国心」を中心にして、「郷土愛」、「人類愛」、「国際理解・親善」などの項目）を「ナショナリズム関連項目」と呼んで主要な考察対象としたい。

（1） 日本の場合

ただ、日本の小学校の場合は、道德は通常の“教科”にはなじまない、という考え方から、各“教科”とは別格の扱いをしており、①特設「道德」②特別活動③各教科——を通して多角的包括的に教えることになっている。また文部省は学習指導要領に基づく指導書の中で、小学校が6年間に教えねばならない道德の内容項目に関して細かい指示を与えているが、“教科”ではないために教科書というものは存在せず、各学校は代わりに文部省作成の指導資料や民間の教科書会社作成の副読本を使用している。

さて、日本の学習指導要領は過去6回改定されたが、特設「道德」が新設された第3次改定（1958年）以来、教えるべき道德の内容項目はほとんど変わっていない。また、その内容項目全体に占める上記ナショナリズム関連項目の割合を調べてみても表1のように過去3回とも全項目の10%に達していない。

そして、現行の第6次学習指導要領（1989年）では“道德教育全体にかかわる目標”の中に“主体性のある日本人の育成”を含め、“主体性のある”という修飾語付きながら初めて正面から“日本人”意識の培養が強調され、⁵ 道德の内容項目（のべ54項目）は表2のように4つの視点（領域）に分類された。

表1 日本の小学校道徳の内容項目におけるナショナリズム関連項目の比率

* 第3次学習指導要領(1958年) 36項目(4区分)中の2項目	5.6%
* 第4次学習指導要領(1968年) 32項目中の2項目	6.3%
* 第5次学習指導要領(1977年) 28項目中の2項目	7.1%

表2 第6次学習指導要領における道徳の内容項目の視点別分類

* 第1視点(延べ15項目)=主として自分自身に関する事
* 第2視点(延べ13項目)=主として他の人とのかかわりに関すること
* 第3視点(延べ9項目)=主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること
* 第4視点(延べ17項目)=主として集団や社会とのかかわりに関すること
計(延べ54項目)

しかし、第4視点に属する内容項目の大半は表3の通り、公民生活一般に関する項目ばかりであり、日本人意識の培養に不可欠なナショナリズム関連項目は①郷土愛②愛国心③郷土愛・愛国心④国際理解・親善の4項目にすぎない。従って、全内容項目に占める割合は7.4%と、いぜんとして10%に達していない。

表3 第4視点の内容項目の詳細

※下線付きがナショナリズム関連項目

(ナショナリズム関連項目の比率)	第4視点の内容項目の詳細
* 低学年(延べ14項目の00.0%)	= (1)社会規範、(2)家族愛、(3)愛校心
* 中学年(延べ18項目の11.1%)	= (1)社会規範、(2)勤労、(3)家族愛、(4)愛校心、(5) <u>郷土愛</u> 、(6) <u>愛国心</u>
* 高学年(延べ22項目の09.1%)	= (1)社会的役割と責任、(2)権利・義務、公德心、規則の尊重、(3)公正・公平・正義、(4)勤労・社会奉仕・公共心、(5)家族愛、(6)愛校心、(7) <u>郷土愛・愛国心</u> 、(8) <u>国際理解・親善</u>
* 全学年(延べ54項目の07.4%)	

(2) 韓国の場合

これに対して、韓国では道徳科を独立した一教科とみなし他教科同様に国定教科書による教育を行って来た。ナショナリズム関連項目は時代によって、その領域こそ「反共・抗日精神」から「国家・民族生活」へ変わってきたが、全項目に占める比重は表4が示す通り、常に20%以上を維持してきた。韓国ではナショナリズム教育が常に重視されてきたことを物語っている。

表4 韓国の初等学校道徳科の内容項目に占めるナショナリズム関連項目の比重

*第1次教育課程(1955年) 「反共・抗日精神」領域項目	……………全項目(不明)の約20.00%
*第2次教育課程(1963年) 「国家生活」領域項目(計14)	……………全項目(57)の24.56%
*第3次教育課程(1973年) 「国家生活」「反共生活」領域項目(計11)	…全項目(42)の26.19%
*第4次教育課程(1981年) 「国の発展」「反共生活」領域項目(計6)	…全項目(21)の28.57%
*第5次教育課程(1987年) 「D」「E」領域項目(計8)	……………全項目(26)の30.77%
*第6次教育課程(1992年) 「国家・民族生活」領域項目(5)	……………全項目(20)の25.00%

第2章 ナショナリズム教育の不足と過剰

第1節 不足を助長した反戦平和主義(日本)

日本の小中学校では戦後ほぼ40年間、反戦平和主義が最高の価値とみなされてきた。したがって道徳教材としても人気が高かったのはいわゆる“反戦平和教材”だった。そうした教材の代表格とされている、『おこりじぞう』の末尾は以下のような内容である。

《[略] なん日も、なん日もすぎていって、広島町の焼け野原には、いきのこった人たちが、ひとり、またひとり、とかえってきました。その人たちは、焼けあとをかたづけました。家も新しく、建てはじめました。

広島町を、もういちどつくりだしたのです。

砂にうずもれていた石じぞうのどうたいも、だれかがだき起こしてくれました。それで石じぞうは、くびから上がらないままで、じっと立っていました。

ある日、ひとりのおじいさんが、とうりかかりました。

おじいさんは、くびから上のない石じぞうをみると、かけよってきて

「おう、おう、おまえは。」

と、ごつごつの手で石じぞうのどうたいをだきました。

「せんそうしらずの石じぞうも、とうとう。」

そうやってまた、「おう、おう。」と泣きました。

「それにしても、あたまなしじゃあもう。」

おじいさんはひとりごとをいって、そのあたりをうろうろと歩きました。石じぞうのあたまにちょうどいい石をみつけるためです。

やがておじいさんは、まるっこい石を見つけました。まるい石には、三つのくぼみまでありました。ちょうど目と口にみえます。

石じぞうのどうたいにのせてみると、大きさ、すわりぐあいも、ぴったりです。

「これでよし、これでよし。」

おじいさんは、まんぞくそうにうなずきました。そして、
「ばあさんも、むすこらも、ぜんぶやられてしまうたよ。のこったのはわしひとりじゃ。」
と、石じぞうのまるい石の顔につぶやきました。

おじいさんは、しょぼしょぼ目をかっぴらき、口をぎゅっとむすんで、仁王さんの
ようなおこり顔になりました。そして、じっと石じぞうをみつめていましたが、そのま
まとぼとぼといっしまいました。

石じぞうはそれからというもの、どうたいに石のあたまをのつけて、くる日も、くる
日も立っていました。

また夏がきて、太陽が広島町のすみずみまで、てらしました。

焼けあとに建てられた、家いへのガラス窓も、石じぞうもまぶしくひかりました。

人びとがいそがしそうに、石じぞうのそばをとおりすぎていきます。

ある日、とおりがかりのひとりがいいました。

「あれ、この石じぞうは。」

もうひとりもいいました。

「なんと、おこったかおじゃ。」

石じぞうはほんとに、いつのまにかおこった顔になっていました。

まるい石のふたつのくぼみは、ぐつとにらんだ目だまにみえます。もうひとつのくぼ
みは、ぎゅっとむすんだ口そのままです。

そこでひとびとは、石じぞうのことを、

「おこりじぞう」

と、よぶようになりました。

いまでも、広島町のある横町に、おこりじぞうはおこった顔で、じっと立っています。》⁶

この教材は、原爆に対する怒りをスローガンのではなくリアルな説得力をもって生き
生きと伝える点では優れた児童戦争文学と言えるかもしれない。しかし、大きな戦争の中
の部分的な悲劇を被害者の側から一方的に描くだけでは、そうした悲劇をもたらした必要
悪的な国家の重さなどは到底、理解できない。それと言うのも、日本は戦前体験から生じ
た国家主義アレルギーと戦後体験から生じた“一国平和主義”中毒に災いされて、およそ
“ナショナルなもの(国家や民族)”全て、従って“ナショナリズム”一般も悪玉として扱
われてきた。その結果、小中学校においてもナショナリズム関連項目は、特設「道徳」の
中でも他教科の中でも敬遠され、ほとんど教えられずにきたのだった。

第2節 過剰を不可避にした反共民族主義(韓国)

これに対して、韓国のナショナリズム教育はまさしく“過剰”だった。そして、その最
大の特徴は、1990年代に入るまで約40年間、良かれ悪しかれ、反共教育を柱に行われてき

たという厳然たる事実である。1950年6月25日に突然、北朝鮮の奇襲を受けて危うく全土を赤化されかけた朝鮮戦争という重い体験をもつ韓国が、北朝鮮をはじめとする共産主義に敵対し、その反共姿勢を“過剰”に強めるのは至極当然のことであり、“過剰”にならないとしたら、むしろおかしいのではあるまいか。表5が示すように、韓国では教育課程全体がいかに改定されても、道徳教育におけるナショナリズム関連項目と言えほぼほとんど反共項目だった。1970年代には“反共5項目”⁷⁾という用語すら存在したのである。

表5 韓国の道徳科の内容項目におけるナショナリズム関連項目一覧

(項目名に冠した数字は全項目の通し番号)

<p>* 第1次教育課程(1955年)におけるナショナリズム関連項目</p> <p>反共・抗日精神——詳細不明</p> <p>* 第2次教育課程(1963年)におけるナショナリズム関連項目(14)</p> <p>国家生活——44、国旗礼節、45、国慶日行事、46、国家愛・民族愛、47、報効奉仕、48、国土防衛、49、愛国・先烈、50、6・25戦争、51、共産党警戒、52、北韓住民、53、戦略戦術、54、精神武装、55、共産党独裁、56、伝統文化、57、国家発展協力</p> <p>* 第3次教育課程(1973年)におけるナショナリズム関連項目(計11)</p> <p>国家生活——32、国家意識呼吹、33、国民矜持・民族自覚、34、先烈と国軍に感謝、35、国家発展協助、36、美風良俗の継承・発展、37、人類愛と世界平和</p> <p>反共生活——38、共産党の蛮行に対する敵愾心、39、北韓の惨状、40、共産侵略の警戒・粉碎、41、共産圏分裂と自由友邦の結束、42、反共統一の信念確立</p> <p>* 第4次教育課程(1981年)におけるナショナリズム関連項目(計6)</p> <p>国の発展(国家生活)——16、国民精神、17、国家発展、18、人類共栄</p> <p>反共生活(平和統一)——19、北韓住民、20、侵略警戒、21、統一意志</p> <p>* 第5次教育課程(1987年)におけるナショナリズム関連項目(計8)</p> <p>D(国家生活)——19、国家愛、20、国家発展協力、21、民族愛、22、国際友好</p> <p>E(統一・安保生活)——23、分断認識、24、北韓現実、25、国防安保、26、統一</p> <p>* 第6次教育課程(1992年)におけるナショナリズム関連項目(5)</p> <p>国家・民族生活——16、国家愛、17、民族愛、18、統一、19、国際友好、20、人類愛</p>

とくに1968年に当時の故朴正熙大統領が「反共民主精神に透徹」した『国民教育憲章』⁸⁾を宣布してから1979年に同大統領が暗殺されるまでの約10年間は反共教育が最高潮に高まった時期だった。同憲章は全文ハングル文字で393文字から成っており格調高い文章となっている。道徳の教科書(高学年用)の扉に大きく掲げられ、道徳の授業で児童生徒に暗唱させたり同憲章の精神を発揚する模範的活動をした人物を表彰したり大々的にキャンペーンを行った点や総字数などが日本の戦前の教育勅語(315字)に似ていたため、野党勢力からは

“親日派が作った韓国版教育勅語”との悪口も流れたほど。

それはともかく、こうした反共教育の昂揚期には反共教材は枚挙に暇が無いほど存在したが、ここでは第6学年第2学期の道德教科書に載っていた典型的な反共教材を一つだけ紹介しよう。1968年11月から12月にかけて、東海[日本海]岸の蔚珍(慶尚北道)、三陟(江原道)両地区の海岸から120人を越える北朝鮮の共匪[共産党武装ゲリラ]が2組に分かれて浸透したが、⁹ 反共意識に燃えた漁山村民たちと軍警隊との連携によって撲滅された。以下に紹介する実話記録は、その撲滅作戦の過程で起こった勇敢な児童の抵抗物語を題材にしたもので、「共産党の蛮行に対する敵愾心」を植え付けるのがねらいだった。題して『僕たちは共産党が嫌いです』。

《[略] 中庭に出て行った共匪は鶏を捕まえて来て、裏の板敷き間に出て行った共匪はトウモロコシ袋をもって来ました。

共匪どもは、このような中でも共産党の宣伝文句を並べ立てました。

嘘宣伝であることを知る承福が我慢できずに

「僕たちは共産党が嫌いです！」

と叫びました。

「なんだと？こいつ……」

「てめえの口癖を直してやろう」

と言ったかと思うと、共匪どもは承福君を外へ引きずり出しました。

「もしもし、子供風情がしゃべった言葉なのに、なぜ、そんなことを？」

と、母親が前に立ち塞がると、側に立っていた共匪の一人が銃の台尻の金属板を母親の肩に無慈悲に打ち降ろしました。

母親はその場所でそのまま、ばったり倒れてしまいました。

「母さん！母さんを叩かないで！」

子供たちは一斉に共匪どもの腰にすがりつきました。

しかし、共匪どもに人情がある訳はありません。彼らは家族全部を外へ引き出して、帯剣を引き抜き、子供たちをめった刺し始めました。

また、共匪どもは2本の指で承福の口を引き裂いた後、小石でたたきのめし、再び帯剣で刺すという、とても目を開いて見ることはできない凶悪な振る舞いをしてかしました。

鋭い悲鳴に目を開けた母親は

「子供たちに何の罪があると……」

と言い、有りったけの力を出して共匪どもの腕に足をばたばたさせながらぶらさがり哀願しました。

帯剣を振り回した共匪どもは今度は、愛児たちを助けてほしいと哀願する母親の胸を無慈悲に刺し倒しました。

このように一家族を残らず殺し終わった共匪どもは、死体を集めて置いてトウモロコ

シの束で覆い隠しました。[略]》¹⁰

江原道平昌郡の山村に住んでいた李承福君(当時、小学校2年生)一家が父親と末弟を除き家族全員、虐殺された経緯が非常にリアルに描かれており、あまりの生々しさに、「敵愾心惹起」よりも「恐怖心増加」の方に効果をうむのではないかと案じられたほどだ。しかし、共産武装ゲリラへの協力者などに厳罰を科すために『国家保安法』だけでなく『反共法』¹¹ という、その名前もずばり反共主義を貫くための法律が1961年から80年まで足掛け20年間も実在した反共国家ならではの現実の厳しさに目を閉ざすわけには行かない。

第3章 曲がり角のナショナリズム教育

第1節 及び腰の正常化(日本)

前章第1節で述べたように、日本は戦後40年間以上、“反戦平和主義”が主流をなしナショナリズムが悪玉視された結果、愛国心も自国に対する誇りも失い、世界から失笑を買ってきた。しかし、ソ連崩壊や湾岸戦争など国際政治の激変に前後して、せめて愛国心と自国に対する誇りはもてる“普通の国”になるべきだという世論変化もあって、ようやく、“主体性のある日本人の育成”やナショナリズム教育にも日が当たり始めた。

ただ、それに取り組む姿勢は極めて及び腰であり、文部省の担当官が編集責任者になっている事実上の指導書シリーズ『小学校道徳 内容項目の研究と実践』は、その第18巻全頁¹²をナショナリズム関連項目に折角割り当てながら、副題を『郷土や世界の人々を愛する』と、肝心の“日本国”や“日本人”に対する愛情を飛び越えて、“郷土愛”から一気に“人類愛”に飛躍するという極めて不自然な表現になっている。そして、いまだに“偏狭な愛国心”を恐れるだけで、“偏狭”ではない、まともな愛国心が存在し得ることには、ついに言及せぬままである。その結果、“主体性のある日本人の育成”を行うのに不可欠なはずの“日の丸・君が代”を正面から扱う教材は道徳の教材としてはどこにも見当たらないのである。

まして、教員たちの間に今なお反戦平和傾向が根強く残る長野市が採用している道徳副読本では、“日の丸はスポーツの国際大会の時にだけ使えばよい”と言わんばかりに、下記の読み物「日本語を知らない日本人」を使い続けており、“主体性のある日本人の育成”には程遠いと言えよう。

《[略] ぼくが、メキシコではテニス王といわれたキンゼイと、いよいよ試合をする日のこと。 テニスコートには、日本とメキシコの国旗がひるがえって、きょうの決戦をものがたっていた。スタンドには、もう始まる前から見物人がつめかけていっぱいだね。

このセントルイスの町に、日の丸の旗がひるがえるなんて、めったにないことなんだ

から、みんながめずらしがるのも無理はない。この町に住んでいる日本人がだれもかれもみな応えんにやってきたのは当たりまえだ。[略]

身なりこそ、みすぼらしいが、気持ちがしゃんとしていて、目がかしこそうで、なんだか日本人らしい顔つきに見えるんだ。そこでいきなり、

「君は日本人かい？」

とたずねてみると、少年たちは、うれしそうにして、

「イエスサー(はいそうです)。」

「やっぱりそうだったのか。君たちは、日本語を知ってるのかい？」

「ノーサー(いいえ、知りません)。」

「どこで生まれたの？」

「この町、セントルイスです。」[略]

ぼくは、日本も知らず、日本語も話せないこのふたりの少年が、遠い、遠い母国の選手のために勝ちをいのってるのを知って、どんなに気強く、うれしかったかしのれない。たとえ世界のどんなすみに育っていても、日本人は、日本の国を愛している、その真心にひどくうたれたね。[略]》¹³

日本では現行の第6次指導要領が発効した段階で、その“主体性をもった日本人”育成のためなら誰への気兼ねもなくナショナリズム教育の正常化に堂々と取り組んでよいはずだが、残念ながら、文部省関係者すらまだ及び腰で恐る恐る正常化の方向を模索しているのが現状のようだ。

第2節 なし崩し的な柔軟化(韓国)

一方、韓国では、前章第2節で紹介した李承福一家惨殺事件は小学生自身が被害を受けた衝撃的な実話だけに現在でも一応取り上げられているが(5学年2学期用の教科書の第10章「統一に向かって」¹⁴)、現在、記念館が建てられている李承福の生家付近の山中をハイキングする一児童とその伯父との会話という設定にし、以下のように、さりと触れた後、話題を平和統一論へ移してしまっている。その結果、この事件がいかに血なまぐさく残酷な事件だったかは全く伝わらず、「共産党の蛮行に対する敵愾心」を植え付ける教材という当初の役割は完全に失われている。

《[略] もう少し進んでから休もうとして下を見たところ、良く整理された田と畑、そして村の様子が美しく清潔でした。

「伯父様、あそこに李承福記念館が見えますね」

「うむ、その隣の銅像も見えるな。私が初等学校に通っていた時の話だから、既に30年近くになるな。同じ民族として幼い生徒までが……。」

伯父様は過ぎた事を考えながら話を聞かせてくださいました。

「1968年、承福が2学年の時のことさ。当時、蔚珍・三陟地区に浸透した北韓の武装共匪どもが承福の家族を殺害したのだ。今はこの土地にそのような悲劇は無さそうになったが……。」

伯父様は目の前に見える美しい景色を見て言葉を繋げられました。

「正字や、あの平和な山河を見ろ。限りなく貴重なものだろう。このような平和を守るために多くの人々が夜遅くまで努力している事を知らねばならない」

「どうすれば平和を守れるのですか？」

「良い質問だ。平和を守ろうとすれば、力が必要ではないか。力は軍隊と武器からのみ生じるのではない。各人が与えられた仕事に最善を尽くし、互いに信頼し、一つになる時に本当の力が生じるのだそうだ」

「6・25〔朝鮮〕戦争も私たちが力が無かったために起こったことですか？」

「そうだよ。力があつたら日本に国を奪われたりしなかったし、6・25のような戦争も起きなかった。同じ民族同士の戦争がこの土地でまた起こってはならない」

「では、統一はどうすれば成し遂げられるのですか？」

「我々がもっと発展し力が強くなり北韓の人々を兄弟のように助けてあげ庇ってあげる時に、統一は成し遂げられるよ。わが民族の統一を戦争を通して成し遂げるのはいけない」〔略〕」

これが、前章第2節で紹介した『僕たちは共産党が嫌いです』と同じ国で同じテーマを扱った約20年後の道徳教科書とは信じにくいほど穏やかなタッチに変わっているが、なぜ反共主義は衰えたのか。

最大の理由は韓国生活レベルが向上したことであろう。“金持ち喧嘩せず”と言われるように、人は経済的にゆとりが出てくればくるほど、非闘争的になるのが一般的傾向である。開発途上国は一般に開発独裁という抑圧と引き換えに経済発展を獲得してきた。韓国の場合は、その典型ともいうべきで、1960～70年代の故朴大統領による反共主義を軸とした開発独裁のお陰で急速な経済発展を達成した結果、一気に自信をつけ、共産主義や北朝鮮に対しても憎悪より理解、敵対より和解の態度をとるようになった。

また、故朴大統領は青春期に受けた日本の軍国主義教育の影響で“なせばなる”の強引な精神主義や泥臭い民族主義でも有名だったが、生活レベルの向上は韓国内部に、そうした傾向から距離を置く風潮を生んだ。

たしかに冷戦の崩壊という世界情勢自体の激変は既成の価値観に大きなショックを与え、いつまでも冷戦時代の意識に囚われていては、時代遅れになりかねない。また、“気を抜いたら、また、いつ侵略されるか分からない”と長年、脅威を感じて来た北朝鮮側に食糧危機や幹部層の亡命事件などイメージダウンが続き、“北朝鮮恐れるに足らず”という楽観ムードが広がったことも事実である。

しかし、安易な脱反共主義やなし崩し的な対北柔軟化は危険を伴う。開発独裁による抑

庄への反動として、急進派学生たちの間では、反共主義の否定、民主主義の称賛ばかりか容共主義〔金日成のいわゆる主体思想への支持〕までが生まれた。過去をきちんと精算しないまま新しい流れに乗れば、順風の時はともかく、逆風の時には再び無原則的に冷戦思考に戻りかねない。その意味で、反共時代を象徴したあの『国民教育憲章』の暗唱運動や推進叙勲式が93年を最後に、ほとんどマスコミの話題にもならないまま、いつの間にか姿を消したのは気になる。

68年に共産武装ゲリラの上陸で大騒ぎになった東海岸の江原道では、96年秋にも武装ゲリラたちを乗せた北朝鮮潜水艦の座礁事件をきっかけに、またまた51日間にわたって大がかりな捕り物作戦が展開され、北朝鮮側に死者(自殺と射殺)24人、逮捕、逃走各1人が出たばかりでなく韓国側にも死者(軍、民合計)が15人も出たのである。反省や教訓をくみ取るけじめの場をきちんと作らずに安易に過去を洗い流す“なし崩し的な柔軟化”が北朝鮮に対する致命的な油断を生まなければ良いが……。

終わりに

以上、初等教育段階でのナショナリズム教育の日韓両国における過去と現在及びその問題を大まかに考察してみた。結論的に言えそうなのは、ナショナリズム教育に関しては、日韓両国は対角線上を接近し始めているが、日本は悠長過ぎ、韓国はせっかち過ぎ、がそれぞれ目立つ、ということである。こうした過渡期の今日こそ、あの『期待される人間像』¹⁵が30年前に“期待”した下記のようなナショナリズムを最も健全なナショナリズムとして再照明すべきではあるまいか。

《[略] 今日世界において、国家を構成せず国家に所属しない個人もなく、民族もない。国家は世界において最も有機的であり、強力な集団である。個人の幸福も安全も国家によるところがきわめて大きい。世界人類の発展に寄与する道も国家を通じて開かれているのが普通である。国家を正しく愛することが国家に対する忠誠である。正しい愛国心は人類愛に通ずる。真の愛国心とは自国の価値をいっそう高めようとする心がけであり、その努力である。自国の存在に無関心であり、その価値の向上に努めず、ましてその価値を無視しようとすることは、自国を憎むことともなろう。われわれは正しい愛国心をもたなければならない。[略]》



最後に、この考察で対象とした韓国の道徳教育の貴重な資料の一部を快く提供して下さったソウル教育大学の柳炳烈教授、資料収集活動を助けて下さった漢陽女子専門大学の金容安教授のお力添えなしには、この考察自体が存在しえなかったことを明記して謝辞に替えたい。

脚 注

- 1、韓国の初等学校（小学校）の道徳科教科書には、表紙と中表紙の間に下図のような太極旗（国旗）のイラストと「国旗に対する誓詞」とを組み合わせたページがある。誓詞は「私は誇らしい太極旗の前で祖国と民族の無窮の栄光のために体と心を捧げ忠誠を尽くすことを強く確約します」となっている。



これに対して日本の小学校段階では教育課程は過去6回改定されたが、今回初めて、その『特別活動編』に《入学式や卒業式などの儀式などにおいては、日本人としての自覚を養い、国を愛する心を育てるとともに、すべての国の国旗及び国歌に対し等しく敬意を表する態度を育てる観点から、国旗を掲揚し国歌を斉唱することを明確にした》と言う規定が含まれた。しかし、この規定に基づく文部省の指導要領は韓国のように“道徳科の学習内容として”真っ正面から扱われるのではなくて、“特別活動の学習内容として”および“小学校4学年社会科の学習内容として”という掘め手からの扱われかたをしている。

- 2、「ナショナリズム」という用語は、韓国で最も権威があるとされている李熙昇『国語大辞典』第3版（1994、民衆書館）には《国家主義、国民主義、民族主義、国粋主義など多くのニュアンスがあり、大抵、国家・民族の統一発展を強調する主義または運動》という短い解説文しかない。

ところが、同じ辞書は「民族主義」という見出し語の解説文となると《民族の独立と自立および統一を第一義的に重視する主義。19世紀初めから国家形成の重要な原理となり、分裂している民族の政治的統一を目標とする形態と外国の支配からの解放・独立を目標とする形態に大別される。民族至上主義。*国民主義》とやや詳しく、1910～45年の足掛け36年間、日本の植民地となっていた韓国ならではの解説文になっている。

従って、韓国では“ナショナリズム教育”という用語も“民族主義教育”と置き換えねば理解されにくいのだが、日本で“民族主義教育”と言うと、在日韓国人ら少数民族が自民族の子女に対して行っている教育という限定された意味にしか受け取られない。

そこで、筆者は“ナショナリズム”という原語をそのまま生かして“ナショナリズム教育”という用語を使用することにした。この用語ならば、まだ十分に定着していないかもしれないが、少なくとも民族的な価値観からは自由で客観的に使用できよう。

- 3、『六法全書』(1997年、有斐閣)
- 4、『大法典』(1997年、ソウル、法典出版社)
- 5、文部省『小学校指導書(道徳編)』(1989年6月、大蔵省印刷局) P. 6～7
- 6、山口勇子『おこりじぞう』(部落問題研究所編『文学読本「新・はぐるま」』1983年6月、社団法人部落問題研究所)
- 7、矢ヶ崎誠治「初等教育の反共教材から」(『朝鮮研究』1979年1月、日本朝鮮研究所、P. 26)
- 8、『国民教育憲章』の全文は以下の通りで、第3段落の書き出しに「反共民主精神に透徹した」がある。

《吾等は民族中興の歴史的使命を帯びてこの地に生を享けた。祖先の輝かしい精神を今日に生かし、内に自主独立の姿勢を確立し、外に人類の繁栄に貢献する時である。ここに、吾等が進むべき道を明らかにし教育の指針とする。

誠実な心と頑健な身体で、学問と技術を学び自己のものとなし、各自もって生まれた素質を啓発し、吾等の置かれた立場を躍進の足場となし、創造の力と開拓の精神を培う。公益と秩序を重んじ能率と実質を尚び、敬愛と信義に根ざした相扶相助の伝統を継承し、明朗で思いやりのある協同精神を培う。吾等の創意と協力によって国が発展し、国の隆盛が自己の発展の基であることをわきまえて、自由と権利に伴う責任と義務を全うし、進んで国家建設に参画し奉仕する国民精神を昂揚させる。

反共民主精神に透徹した愛国と愛族が吾等の生きる途であり、自由世界の理想を実現する基盤である。永く子孫に伝えるべき栄光の統一祖国の明日を確信し、信念と矜持をもった勤勉な国民として、民族の叡知を集め、たゆまぬ努力によって、新歴史を創造しよう。

1968年12月5日 (奥野弘氏翻訳)》

奥野弘『カヌンマリコワヤ』より

- 9、1968年という年は北朝鮮が韓国に対して武力解放戦術をとった年であり、年初に青瓦台[大統領官邸]襲撃、米海軍艦艇プエブロ号拉致など一触即発の危険な事件が相次いだ。
- 10、『国定教科書・道徳6—2』(1973年) P. 64～72
- 11、『反共法』は『国家保安法(1960年6月に公布され現在も継続)』が取締の対象とする反国家団体のうち「共産系列の路線に従い活動する団体[北朝鮮の労働党や韓国内の親北朝鮮グループなどを指す]」にしばって取り締まることを目標として1961年7月に公布され1980年12月に廃止された法律。第1条(目的)にはっきりと「国家再建課業の第一目標である反共体制[アンダーラインは筆者]を強化すること」と明記していた。
- 12、押谷由夫・立石喜男『小学校道徳 内容項目の研究と実践・第18巻「郷土や世界の人々を愛する」』(1991年11月、明治図書)
- 13、信濃教育会『わたしたちの道 6』P. 27～30
- 14、『国定教科書・道徳5—2』(1996年、ソウル、国定教科書株式会社) P. 151～154
- 15、中央教育審議会第19特別委員会『期待される人間像』P. 36

参考文献

[日本語文献]

- 文部省『小学校指導書(道徳編)』(1989、6、大蔵省印刷局)
 瀬戸真・押谷由夫編『道徳の解説と展開』(1989、7、教育開発研究所)
 押谷由夫・立石喜男編『小学校道徳 内容項目の研究と実践・第18巻「郷土や世界の人々を愛する」』

(1991年11月、明治図書)

下村哲夫編『平成9年度教育法規便覧』(1996年7月、学陽書房)

文部省編『小学校道徳指導方法の事例と研究』(1961年11月、光風出版)

文部省編『小学校 道徳の指導資料とその利用1～4』(1976～81年、大蔵省印刷局)

文部省編『小学校 読み物資料とその利用』(1994年9月、大蔵省印刷局)

信濃教育会編『わたしたちの道1～6』(1990年～、信濃教育会出版部)

部落問題研究所編『文学読本「新・はぐるま」』(1983、6、部落問題研究所)

遠藤五郎ほか編『道徳の時間のための資料選集(小学校)』(1967年、第一法規)

清水幾太郎『愛国心』(1950年3月、岩波新書)

日本文化連合会編『愛国心について』(1961年9月、日本文化連合会)

新井恒易編『愛国心と教育』(1958年1月、三一新書)

原富男『世界各国の教科書にあらわれた愛国心』(1972年9月、有信堂)

エイデル研究所編『日の丸・君が代と新学習指導要領』(1990年3月、エイデル研究所)

歴史教育者協議会編『子どもと学ぶ日の丸・君が代』(1992年10月、地歴社)

高知県幡多言語の会編『平和教材をどう教えるか』(1986年9月、明治図書)

大槻健ほか『愛国心教育の史的究明』(1970年9月、青木書店)

飯田芳郎『現代道徳教育考』(1985年2月、文教書院)

宇佐見寛『「道徳」授業をどうするか』(1994年4月、明治図書出版)

新堀通也編集『戦後教育の論争点』(1994年11月、教育開発研究所)

押田由夫ほか編『道徳教育』(1993年1月、ミネルヴァ書房)

浪本勝年ほか編『史料・道徳教育の研究』(1982年9月、北樹出版)

国立教育研究所内道徳教育研究会編『道徳教育の現状と動向』(1982年10月、ぎょうせい)

中野光ほか編『史料・道徳教育』(1982年7月、総合労働研究所)

波多野述鷹ほか編『価値観と道徳』(1974年5月、第一法規)

小笠原道雄編『道徳教育原論』(1991年12月、福村出版)

村田昇編『道徳教育』(1981年9月、有信堂)

『教育学全集15・道徳と国民意識』(1969年1月、小学館)

中央教育審議会第19特別委員会『期待される人間像』(1961年12月、文部省)

海老原治善代表『資料 現代世界の教育改革』(1983年8月、三省堂)

海外教育事情研究会編『新しい世界の学校教育』(1972年2月、第一法規)

馬越徹ほか編『現代アジアの教育』(1989年6月、東信堂)

日本社会科教育学会編『社会科における公民的資質の形成』(1984年、東洋館出版社)

奥野弘『カヌンマリコワヤ』(1988年10月、幻想社)

矢ヶ崎誠治『朝鮮半島統一問題の歴史と現況』(1979年3月、教育社)

矢ヶ崎誠治『現代韓国の指導者たち』(1979年7月、教育社)

[韓国語文献]

李熙昇編『国語大辞典』第3版(1994年3月ソウル、民衆書館)

呉世敬編『大法典』(1997年1月ソウル、法典出版社)

『国定教科書・正しい生活1～2』(1996年ソウル、国定教科書株式会社)

『国定教科書・道徳3～6』(1996年ソウル、国定教科書株式会社)

韓国教育部『初等学校教育課程解説(II)』(1994年1月ソウル、大韓教科書株式会社)

韓国教育部『正しい生活指導書1～2』(1996年ソウル、韓国教育部)

韓国教育部『道徳指導書3～6』(1996年ソウル、韓国教育部)

[英語文献]

William K. Cummings et al. "The Revival of Values Education in Asia and the West" (1988, Pergamon Press, Oxford)

R. Murray Thomas et al. "International Comparative Education" (1990, Butterworth-Heinemann, Oxford)